

# 絵本を楽しむ

山浦 美幸

## 1. 絵本が好きですか？

絵本について語る時、漠然と共通の認識が成り立っているように思われていますが、絵本という言葉からイメージするものはそれぞれ違うのではないかと思います。絵本を言葉で説明すると各自の持っているイメージがはっきりします。

例えば、ほぼ毎ページ絵が書いてある本でしょうか？あなたは絵本といっでどんな本を思い浮かべますか？絵本を楽しんだ経験がないために、ある特定の人のための本といった評価になってはいないでしょうか？あるいは、とりえず読み聞かせをしなければならぬと思い込んでいないでしょうか？いざ説明しようとする、以外と言葉にならないのではないかと思います。こういった絵本の概念の問題以外にも、1週間分の新刊情報だけで200ページの冊子ができるほど本が出版されている現在、自分の好みにあった絵本に出会うことは、年齢を問わず難しい状況になってきています。

そこで絵本を楽しんでもらうために絵本についてもう一度考えてみたいと思います。絵本については今までいろいろな角度からさまざまな研究がすでに行われています。児童文学の中のひとつのジャンルとして絵本を論じたL.H.スミスの『児童文学論』、日本の絵本の歴史を子どもの文化まで視野を広げて体系的に解説した瀬田貞二の『落穂ひろい』、子どもに読み聞かせることの重要性を説き、絵本を解説した松岡享子の『えほんのせかい、こどものせかい』、作家や編集者など絵本を作り出す側の視点を盛り込んだ渡辺茂男の『絵本の与え方』や、松居直の『絵本とは何か』、代表的な絵本作家の特徴を分析した吉田新一の『絵本の魅力』、子どもの本の評論集という副題がついた絵本のすすめから作家論まで含めた瀬田貞二の『絵本論』など絵本に対する理解を深める手助けになる完成度の高い文献は数多くあります。そこで今回は視点を変えて絵本とは何かという絵本論や子どもの読み手だけにとらわれず、絵本をたっぷり楽しむための方法を考えてみたいと思います。

## 2. 初めて絵本に出会った時期と絵本の選び方の関係

皆さんが絵本に初めて出会ったのはいつでしょうか？初めて出会った絵本を覚えていらっしゃるでしょうか？絵本の紹介や絵本の解説をされていて気がついたことがあります。それは、絵本を読んでもらったことのある人とならない人では絵本の選び方が違うということです。そこで、絵本に出会った時期と選び方の関連を整理してみたいと思います。

### (1) 読んでもらって楽しい絵本

絵本を読んでもらったことのある人は、比較的幼い時期に絵本に出会っています。文字が読めるようになる前に絵本に出会っているともいえます。読んでもらう楽しさを知っているので、読んでもらう、すなわち音読することを前提として絵本を選ぶ傾向があります。そこで、読んでもらって楽しい絵本についてテキストと絵を分けて特徴を挙げて見ます。

#### ア 読んでもらって楽しい絵本におけるテキストの特徴

読んでもらって楽しい絵本を理解してもらうために便宜上、わらべうたや詩、言葉遊びやオノマトペなどを扱ったことばの絵本と物語絵本といわれる大人の小説にあたる絵本のふたつに分けて特徴を見ていきます。

#### ① ことばの絵本

最初にオノマトペと言葉遊びが混ざったような『カニツンツン』を取り上げます。この本は図書館などでたまたま手に取ったとしても、ページを開いたとたん書架にもどされることが多いのではないかと思われる本の代表です。

最初のページを書き出して見ます。「カニ ツンツン ビイ ツンツン ツンツン ツンツン カニ チャララ ビイ チャララ チャララ チャララ」こうやって文字だけを追うと戸惑われるかと思えます。真面目な人ほど意味や正しい読み方を求めて困ってしまうかもしれません。実はこういった本に読み方の正解はありません。思い切って声をだして読んでみてください。つかえてもかまいません。何度も読んでみましょう。自分で読みやすいスピードや強弱がついてきませんか？声に出すと以外とおもしろいリズムが生まれて

きます。自分の耳を信じて自分が心地のよいリズムで読んでいく絵本です。言葉は音読することによって初めて生き生きとしてくる場合があります。特に擬音の豊富な日本語は声に出すことによってその美しさが伝わる人が多いのではないのでしょうか？

次に『ことばあそびうた』を見てみます。

これは詩の絵本です。こちらもひとつめの詩を書き出してみます。「ののはな／はなののののはな／はなのななあに／なずななのはな／なもないのばな」原文は縦書きなので改行の部分に／をいれましたが、ご覧のとおりすべてひらがなで句読点もありません。

また、活字も手書き風で文字までが絵のような表現がされています。詩の本だと思うと大人はとかく意味を求めがちですが、この本のおもしろいところは意味を考えずにそのまま声にだして楽しめるところにあります。文字を覚えてたての子どものように拾い読みをしていても、意味を無視して適当なところで切っても楽しめます。このように読んでもらって楽しい絵本には音読することによって思ってもかけない心地よさが生まれる特徴があります。

## ② 物語絵本

物語絵本は主人公が登場し、クライマックスに向かい安心する結末へと向かうという作りになっています。ここでは、読んでもらって楽しめる本の代表ともいえる、登場人物が次々と増えて同じフレーズが繰り返し出てくる絵本を取り上げます。

『おおきなかぶ』はおじいさんがかぶを植えます。そのかぶがとてつもなく大きくなって抜こうとしても抜けません。そこで、最初におばあさん、次に孫とかぶが抜けるまで、抜くのを手伝ってくれる人を増やしていき、なんとかかぶを抜こうとするお話です。「おじいさんは かぶを めこうと しました。うんとこしょ どっこいしょ」で始まったフレーズは抜き手が増える度に同じ言葉を繰り返し、フレーズが長くなります。いぬが手伝った場面のテキストは「いぬが まごを ひっぱって まごが おばあさんを ひっぱって おばあさんが おじいさんを ひっぱって おじいさんが かぶをひっぱって うんとこしょ どっこいしょ」となります。黙読

すると同じ言葉が繰り返し使われてしつこく感じるほどです。登場人物をいちいち増やさずに省略して「みんなでかぶをひっぱりまし  
た。」ではだめなのだろうかと思いますが、登場人物が増える度に  
同じフレーズを丁寧に繰り返していきます。けれども音読するところ  
のくりかえしが言葉のリズムを生んでとても楽しい感じになります。

また、繰り返すことによって物語の筋を追うことが苦にならなく  
なり、確実に物語が伝わります。こういった本の楽しさは声に出して  
読んでもらった経験が豊富な人ほど知っています。

この他にも『おかあさんだいすき』の中にはいっている「おかあ  
さんのたんじょうび」なども心地よい繰り返しが印象的な話です。

#### イ 読んでもらって楽しい絵本における絵の特徴

絵本を読んでもらったことのある人は絵を細部にわたって非常によく  
見えています。例えば、親子で絵本を楽しんでいる場合、読み手の親  
御さんは文字を追うのに夢中でどんな絵が描いてあるのか気づいてい  
ない場合が多々あります。一方読んでもらっている子どもは物語を聞き  
ながら絵に集中するので、読み手が気づいていない細部の変化も見  
逃しません。

『てぶくろ』を例に見てみます。物語は、おじいさんがてぶくろを  
落とすところから始まります。てぶくろを見つけた動物が次々と住み  
始めます。はじめはねずみ、次にかえると小さい動物だったものがだ  
んだん大きくなり数も増え、最後にはとてもてぶくろに入れそうな  
クマがやってきてという繰り返し楽しいお話です。ところが、文  
章では触れていないのに、てぶくろの住人が増える度にてぶくろの家  
はひさしがついたり窓ができたりと改装されていきます。この変化は  
文章に表されていないので、事前に絵をじっくり見ていない読み手は  
この変化に気づかずに読み終わってしまいますが、聞き手はこの絵の  
変化も含めて絵本を楽しみます。聞き手が物語に沿って絵の変化を堪能  
することで、登場人物に寄り添うことができ、物語の推進力が高まる  
作りになっています。物語を聞きながら同時に絵を見るため、物語  
の筋を追うことが容易にでき、より物語を楽しむことができます。

また、子どもたちは気に入った絵本を繰り返し読んでもらうちに、

文字が読めなくても、絵をみながら文章を空で言えるようになることがあります。これは暗記している部分もありますが、絵をみているだけでも物語の筋が追えるような絵の構成になっていることも大きな要因といえると思います。

## (2) 自分で読んで楽しい絵本

絵本を読んでもらわなかった人は、文字が読めるようになってから絵本に出会っています。自分で本を読み始めるようなる小学生時代に絵本に出会ったか、一般的な本を十分読んでから思春期以降大人になって絵本に出会っています。自分で読んできた人は絵本も一般の本と同様に黙読することが当たり前なので、黙読することを前提として絵本を選びます。自分で読んで楽しい絵本は黙読して楽しむ絵本といえます。

### ア 自分で読んで楽しい絵本におけるテキストの特徴

自分で読んで楽しい絵本は、物語の筋を追うだけでなく、行間を楽しみ、物語に関連する事項を思い起こすことができる作りになっています。そのため、読んでもらうと自分のペースで楽しめずに満足感が得られません。

『のはらひめ』で確認してみます。お話は、おひめさまになりたいと思っていた「まり」という女の子がおひめさま城に迎えられおひめさまになるための修行をする内容です。世界中のおひめさまがすべてここで学んだという由緒正しいおひめさま城での修行は、古今東西のさまざまなおひめさまを思い出させるもので、お姫様のお話をたくさん知っている人ほど楽しめるしかけになっています。そのために、次々読み進まずに時には読むのを止めて、修行のモデルになったお姫様のお話を確認したくなります。テキストの特徴としては、物語の筋だけでなく細部の枝葉も楽しむ作りということになります。

### イ 自分で読んで楽しい絵本における絵の特徴

自分で読んだほうが楽しい絵本の絵の特徴として、物語を追うことを止めて、じっくり絵を觀賞したくなるような絵が描かれていることがあげられます。『エリザベスは本の虫』では毎ページ彩色されたメインの絵の他に、そのページのエピソードを象徴する絵がまるで模様のように黒の線で、小さく書き込まれています。このような凝った作

りですと自分で読んだほうが見たい場所を見ただけみることができ、満足感が得られます。更にじっくり絵に親しむタイプでは『絵描き』のようにページの連続ではなく1ページずつ独立させても楽しめる画集のような絵本もあります。

### 3. 読み方の違いが生む絵本の見方

前段で述べたように読んでもらったことのある人とない人では、絵本の楽しみ方が違います。この楽しみ方の違いを元にテキストと絵に分けて整理してみます。

#### (1) テキストの特徴

絵本のテキストは、黙読する場合と音読する場合があります。ここに絵本楽しみ方の違いの原因があると思います。物語絵本で考えてみましょう。「音読する」ということは文章に制限がかかります。

一つは音読する場合、文字を見なくても理解できることばである必要があります。

二つ目には、聞いて理解しやすく心地よい文章であるために繰り返しや韻をふむなどの詩的な要素が求められます。

そして三つ目には、口承で伝えられた昔話のように余計なものをそぎ落とし、主人公の行動を追っていくことで話が目に見えるような文章である必要があります。このように考えてみると、絵本を整理する基準として、聞いて理解できるかという度合いがものさしになるのではないかと思います。

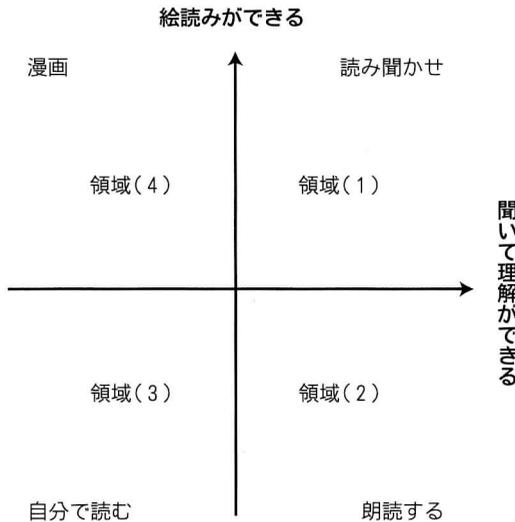
#### (2) 絵の特徴

読んでもらって楽しんだ体験のある人たちに共通なのは、絵は物語の筋を追うための道具であり物語の進行と常に一致したものとして楽しむ姿勢です。自分で読んで楽しんだ人たちには、絵を物語の進行と必ずしも一致させず、絵の質感まで共感し細部までこだわって楽しむ姿勢があります。どちらも絵を楽しんでいるのですが、読んでもらった人たちの絵の見方は先をもっと知りたいという気持ちが強く、自分で読んだ人の見方は先に進みたいという気持ちが弱いと考えられます。この事は、絵だけみて物語の筋を追っていける力、すなわち絵読みができるという力

が絵を考える際の特徴になっている事を表しています。

#### 4. 絵本を十分楽しむための試み

「聞いて理解できるという基準」と「絵読みができるという基準」を絵本を見分ける手助けとして考えてみましたが、もう一步進めて、二つの条件を組み合わせることで絵本を下図のように4つの領域に分類してみました。



(1)の領域 … 絵読みができて聞いて理解できる絵本

この領域に含まれる絵本は、読み聞かせに向く本です。物語を聞きながら絵をじっくり眺めることでより物語を楽しむことができる絵本です。先程例にあげた『てぶくろ』や『おおきなかぶ』その他にも『三びきのやぎのがらがらどん』、『かばくん』、『だいくとおにろく』、『かもさんおとおり』、『わたしとあそんで』等がこのタイプに分類されます。

(2)の領域 … 聞いて理解できて絵読みができない絵本

この領域の絵本は読み物と絵本の中間にある本です。読み物にしては挿絵が多く、絵本としては絵だけ追っても内容が分かるだけの絵がない本です。昔話、伝説、民話、神話などの口承文学をベースにしたものが

このタイプの絵本に多いため聞いて理解することができます。ただ昔話の絵本などは『てぶくろや』、『おおきなかぶ』、『だいくとおにろく』のように絵読みができるものも含まれるので注意が必要です。

また、こういった口承文学の場合、絵にしにくいものが登場することがあります。例えば、昔話によく出てくるフレーズとして「お日様が恥ずかしがるくらい美しい娘」とか「誰でもひと目ただけで好きになる娘」、「世界の果て」など耳できくとイメージできても、絵にすると見た人の共感を呼びきれないものになってしまうものが話の核心に存在することがあり、絵が少なくなってしまうことがあります。

また、耳で聞いて理解しやすい分、物語の展開が速く絵で表現しようとすると場面が多くなり、絵にしきれないことがあります。そのため見ている絵と聞いている物語が一致しない状況が生まれ、絵と文章のバランスが崩れることがあります。この場合、朗読もしくは自分で読んだほうがその魅力が伝わります。代表的なものとして『七羽のからす』、『マーシャとくま』、『王さまと九人のきょうだい』などが上げられます。

(3)の領域 … 絵読みができなくて聞いて理解できない。

この領域の絵本は黙読することで物語のおもしろさが伝わる本です。特徴としては(2)の領域と同様に挿絵としては絵が多く、絵本としては絵が足りないので、絵読みができません。

また、テキストは、状況描写、心理描写が多く細部まで書き込むので聞くより自分で読んだ方が理解しやすい内容です。中でも心理描写の多いものは、読んでもらうと共感するのが難しくなる場合があります。音読すると無意識のうちに読み手の心情が入るため、聞き手は読み手というフィルターがかかった状態で物語向き合わなければならない、内容がストレートに伝わらないことがあるからです。他にも状況描写が多い場合は、物語がどんどん進まない、聞いただけでは話の核心をつかむのが難しくなります。『マジョモリ』、『1000の風 1000のチェロ』などはこのタイプの絵本です。その他に哲学的なテーマを内包しているために通り一遍に聞いただけでは伝わりきらない『はっばのフレディ』のような絵本も含まれます。

(4)の領域 … 聞いて理解できなくて絵読みができる。

この領域の絵本の代表は漫画です。漫画は細かくコマ割りされているので絵だけ見ていくことで話の内容が理解できます。究極の絵読みができる本と言えます。一方テキストのほうは絵から切り離して文章だけ読むと理解できません。

漫画を思い起こしてもらおうと分かりやすいのですが漫画を読むというのは本を読むのとは違った読み方をします。漫画を読む時、読み手は絵と同時に文字を追うということは無意識のうちに行います。絵本を自分で読む時は、文字を読んでから絵を眺める、もしくは絵を眺めてから文字を読むという繰り返して読み進んでいきます。漫画の場合は絵と文字を同時に認知するという特徴があります。そのために言葉は凝縮され、擬音や台詞で物語が進んでいて、文章の形をとっていなくても成り立ちます。このため絵抜きで読み上げると、無意味な言葉の羅列だったり、言葉の響きとしても楽しめなかったりします。絵と文章が切り離せないのが漫画とも言えます。このため漫画は読み聞かせたり音読するには不向きの本といえます。このように考えると漫画と絵本は違うのではないかという意見もありますが、漫画の手法を生かした絵本、例えば『さむがりやのサンタ』や『黒い島のひみつ』といった子どもたちに長く愛されている絵本があります。この二人の作家は他の作品も漫画の手法を使っています。他にも『海のおばけオーリー』、『名馬キャリコ』などもこのタイプの絵本です。

## 5. 絵本を楽しむために

絵本を4つ領域に分類していえることは、それぞれの絵本の持っている魅力を十分感じるためには、その特長を生かす読み方があるということです。絵本は文字を読むことに不慣れな子どものものであると考える場合、問題にならなかった点ですが、大人から子どもまで年齢制限なく楽しめるものとして扱う場合は、音読するか黙読するかに注目する必要があるということです。

また、絵読みが必要か必要でないかも、絵本の楽しみ方が変わってくるポイントになっています。この点を意識してもらおうことが、絵本を楽しむ

るか楽しめないかの分かれ目だと思います。中でも注意が必要なのは、読み聞かせに向く本の扱いです。特に読んでもらう機会の少ない大人は、黙読してつまらない絵本という評価をすることのないよう、ぜひ読んでもらう機会を作ってみてください。

逆に読んであげる立場の方は、自分で読んだ方がおもしろい本を読み聞かせに使って、その本の魅力をそいでしまわないよう気にかけてください。もちろん分類に迷うような絵本もあります。そんな時はまず文章を読まずに絵だけを順を追って見てください。次に声にだして読んでみてください。それでも迷ったら誰かに読んでもらってください。これでかなりはっきりすると思います。

大切なのはそれぞれの絵本が一番いい状態で読み手と出会うことです。絵本は絵と文章の共同体なので、あらすじや書評だけではおもしろいかどうかの判断がつきにくいものです。実際に手にとってじっくりながめることが欠かせません。いままで絵本を敬遠されてきた方も、楽しんでこられた方もどんどん絵本を読んでみてください。絵読みができることや聞いて理解できることを意識することで、新たなお気に入りの絵本が見つかることを期待しています。

## 参考文献

- 『児童文学論』L.H.スミス／作 石井桃子 他／訳 岩波書店
- 『落穂ひろい 上下』瀬田貞二／作 福音館書店
- 『えほんのせかい、こどものせかい』松岡享子／作 日本エディタースクール出版部
- 『絵本の与え方』渡辺茂男／作 日本エディタースクール出版部
- 『絵本とは何か』松居直／作 日本エディタースクール出版部
- 『絵本の魅力』吉田新一／作 日本エディタースクール出版部
- 『絵本論』瀬田貞二／作 福音館書店
- 『カニツンツン』金関寿夫／文 元永定正／絵 福音館書店
- 『ことばあそびうた』谷川俊太郎／詩 瀬川康男／絵 福音館書店
- 『おおきなかぶ』A・トルストイ／再話 佐藤忠良／画 内田莉莎子／訳 福音館書店
- 『おかあさんだいすき』マージョリー・フラック／文・絵他 光吉夏弥／訳・編 岩波書店
- 『てぶくろ』ウクライナ民話 M・ラチョフ／絵 うちだりさこ／訳 福音館書店
- 『のはらひめ おひめさま城のひみつ』なかがわちひろ／作 徳間書店
- 『エリザベスは本の虫』サラ・スチュワート／文 デイビット・スモール／絵 アスラン書房
- 『絵描き』いせひでこ／作 理論社
- 『三びきのやぎのがらがらどん』北欧民話 マーシャ・ブラウン／絵 瀬田貞二／訳 福音館書店
- 『かばくん』岸田衿子／文 中谷千代子／絵 福音館書店
- 『だいくとおにろく』松居直／再話 赤羽末吉／画 福音館書店
- 『かもさんおとおり』ロバート・マックロスキー／文・絵 渡辺茂男／訳 福音館書店
- 『わたしとあそんで』マリー・ホール・エッツ／文・絵 よだじゅんいち／訳 福音館書店
- 『七わのからす』グリム童話 フェリクス・ホフマン／絵 瀬田貞二／訳 福音館書店

『マーシャとくま』 E・ラチョフ／絵 M・ブラートフ／再話 内田莉莎子／訳 福音館書店

『王さまと九人のきょうだい』 中国の民話 君島久子／訳 赤羽末吉／絵 岩波書店

『マジョモリ』 梨木香歩／作 早川司寿乃／絵 理論社

『1000の風 1000のチェロ』 いせひでこ／作 偕成社

『葉っぱのフレディ —いのちの旅—』 レオ・バスカーリア／作 みらいなな／訳 童話屋

『さむがりやのサンタ』 レイモンド・ブリックス／作・絵 すがわらひろくに／訳 福音館書店

『黒い島のひみつ タンタンの冒険旅行1』 エルジェ／作 川口恵子／訳 福音館書店

『海のおばけオーリー』 M.H. エッツ／文・絵 石井桃子／訳 岩波書店

『名馬キャリコ』 バージニア・リー・バートン／文・絵 瀬田貞二／訳 岩波書店